

大興安嶺をこえて

—中東鉄道を巡る調査記録（2012 年夏）—

広川 佐保

はじめに

本稿は、2012 年 8 月 25 日から 9 月 1 日にかけて実施した、北京経由で内モンゴル自治区フルンボイル市所属の満洲里市、シネバルガ左旗・右旗、ハイラル市、ジャラントン市から黒龍江省チチハル市に至る調査記録である。参加メンバーは、加藤直人氏、江夏由樹氏、華立氏、楠木賢道氏、杉山清彦氏、中見立夫氏、松重充浩氏、柳澤明氏、そして筆者である。

今回の調査では、まず中国内の中東鉄道の起点である満洲里からチチハルまで、現在の浜州線を辿りながら、大興安嶺を横断しつつ、中国・モンゴル・ロシア間国境付近における貿易、紛争の歴史、そして清朝の遺構を確認することが目的である。大興安嶺調査に関しては、京都大学を中心とする北部大興安嶺探検隊によって 1942 年に実施された調査が想起されるだろう（今西錦司編『大興安嶺探検：1942 年探検隊報告』毎日新聞社、1952 年）。これに対し、我々の調査は、主に大興安嶺南部を中心に実施されたものである。

北京経由、満洲里

8 月 25 日、参加メンバーは北京空港に集合し、18 時半頃、予定より 1 時間遅れで出発し、空路で 21 時 30 分に満洲里に到着した。到着後、満洲里友誼賓館に宿泊する。

8 月 26 日、9 時過ぎに、中露国境の鉄道国境に位置する国門へ向かった。満洲里市は、フルンボイル市シネバルガ左旗と右旗にまたがる地域に位置し、中東鉄道の拠点の一つとして建設された街である。ロシア領に近接する国門周辺一帯は互市貿易区とされ、中国人観光客で賑わっていたが、2013 年 8 月の時点では外国人は立ち入り禁止となっていた。周囲を見回してみると昔の国門がそのまま保存されており、国境付近は有刺鉄線が張り巡らされていた。そのすぐそばの国際貿易高廈の内部には中国製の衣料品が並んでいるものの、客はほとんどいない。続いて、車両用の税関である満洲里口岸へ移動する。税関は非常に立派な建物で、周辺には DVD（海賊版）や大きなぬいぐるみを抱えた中国人商人がスタンバイし、ロシア人が車やバスでやって来るのを待ち構えていた。

その後、阜大街沿いの俄羅斯芸術博物館付近の古代歴史展厅を見学する。同展厅は海洋生物館、近代歴史館など 4 棟のロシア式建物からなるが、展示物は写真や剥製が多く、ほどなく見学を終えた。続いて満洲里駅近くの一道街に残るオレンジ色の建物の旧ロシア領事館（元蘇聯商務処、現満洲里城市管理行政執法局）を外部から見学する。そこで中見立夫先生より、モンゴルの民族主義者であるメルセーがこの旧ロシア

領事館で消息を絶ったお話しをうかがった。一道街周辺には帝政ロシア時代の「満洲里俄式建築群」が数多く残っており、なかには木造建築もあった。すぐそばのキオスクで地図を購入し、鉄道の陸橋へ上ると、木材を運ぶ輸送車が並んでいるのが見えた。

昼食後、満洲里市内西部に位置するジャライ・ノール炭鉱へ移動する。ジャライ・ノールまでの道のりは、一面草原が広がっており、牧民の固定家屋や牛の群れなどが垣間見える。エルグネ河、ハイラル河を越えるとあたりには湿地が広がっていた。15時30分、現在のジャライ・ノール西駅に到着、駅舎は真新しい。16時、ジャライ・ノール炭鉱に到着する。同炭鉱は20世紀初頭、中東鉄道の敷設にともなって開発されたのち、1930年代にソ連が中東鉄道を売却したさい日本側に買収された。露天掘りの炭鉱は、想像以上に広大で、現在も採掘が続けられている。その後、ジャライ・ノール駅へ移動する。現在使用されている駅舎は新しいものの、すぐ向いに古い給水塔やロシア時代の駅舎などが残っていた。駅周辺見学を終えて満洲里に向かう途中、高台の草原で休憩する。そこから満洲里市街を眺めると、草原の中に浮かんでいるように見え、満洲里が人工的に建設された都市であることを実感する。そうこうしていると遊牧民とともに羊の群れが通りかかった。再び車を走らせると、草原にはロール状の刈り取った草の束がたくさん並んでおり、風力発電の風車がゆっくりとまわっていた。夕食は三道街の中華風ロシア料理で、ボルシチやサラダなどをいただく。

満洲里からシネバルガ右旗、そして左旗へ

8月27日、朝8時に出発して、旧中東鉄路臨時警備総司令部（満洲国時代は小学校、現第六中学）を見学する。その後、新華書店で地図を購入して中蘇街に出ると、観光客向けの店がずらりと並んでおり、いずれの看板にもキリル文字のロシア語表記が付記されている。店頭には、望遠鏡、毛皮、色とりどりのスカーフやロシア製チョコレートが並んでいた。通りに面した満洲里飯店内には、帝政ロシア時代の写真が展示されており、フロントそばでロシア人とのハーフである初老の女性が応対されていた。

つぎに三道街と四道街の中間に位置する満洲里市博物館に向かう。博物館は、ちょうど改築中であったものの、華立先生の交渉により内部の見学が許された。博物館の収蔵物の一部は、前日に見学した古代歴史展庁に展示されていたようである。館内の案内によれば、ここは1920年代に中ソ合弁の鉄道技工学校（中東鉄路満洲里技工学校）として設立され、その後、日本の警護隊弁公楼などを経て、戦後は中長鉄道満洲里分局弁公楼、および満洲里鉄道病院として利用されたという。中庭には、清代の石碑の一部、ユダヤ人の墓石、陸軍兵士の墓石などが保管されていた。

続いて、満洲里駅南側に移動し、満洲里沙俄監獄陳列館（入場料無料）を見学する。同館は1903年頃建設された3階建ての建物である。内部では、蠟人形が配置されるなど当時の模様が再現され、地下には監獄が設置されていたが、非常に陰鬱な雰囲気であった。その後、11時に満洲里駅前広場に移動する。南二道街あたりには映画館である満洲里倶楽部があり、右手の南一道街に入ると帝政ロシア時代の建物や旧満鉄社宅が建ち並んでおり、後者は崩壊寸前であるものの現在も使用中であった。

11時半、満洲里を出発しシネバルガ右旗へ向かう。途中で何度も羊の群れと遭遇しつつ、お昼過ぎにフルン湖に到着。湖は想像していたよりも平面的で、一面に湿地が広がっており、牛の群れがゆっくりと草を食んでいた。14時半に出発し、シネバルガ右旗の中心アルタンエメールに到着後、遅い昼食をとる。ここに来ると看板の表記は漢語とモンゴル文字となる。ちょうど大雨にみまわれたが、目的地である思歌騰博物館（入館料 10 元）へ入館する。なお、思歌騰とは、モンゴル語でセヘーテン、すなわち「知識階級、インテリ」という意味である。同博物館は、文化大革命期に下放された知識青年を主題とし、内部には知識青年達の衣類、生活道具、彼らをかたどったブロンズ像、ポスター、書籍など展示されている。ここでは文革期、シリングルで暮らしておられた華立先生から貴重な体験談をうかがうこともできた。我々のほかに、天津(?)から来たという元知識青年の方も見学していた。16時半に見学を終えると、空には大きな虹が架かっていた。

その後、次の目的地のアムガランへ向かう前に、かの有名なボグド・オーラ（聖なる山）に立ち寄ることになった。車を飛ばして 17 時半にボグド・オーラに到着する。そうすると、どこからかバイクに乗った管理人がやってきて、チケットと引き替えに 20 元を徴収される。ボグド・オーラは大小の山からなり、男性は大きい方、女性は小さい方に登ることを許されている。我々のほかに見学者はおらず、1 時間ほどかけて山を登っていくと、山頂にオボーが祀られ、色とりどりのハダック（祝布）が奉納されていた。周りにはほとんど遮る物がなく、見渡す限り、雄大な草原の風景が広がる。筆者が、内モンゴルでこれほどの大草原を見たのは初めてである。帰国後、調べて見ると、ちょうど 8 月 19 日に「フルンボイル第 2 回ボグド・オーラ国際民族文化旅遊節」が開催され、ここで盛大にオボー祭祀が行われていたらしい。下山するところには 19 時になっていたが、あたりはまだ明るい。ボグド・オーラを出発後、日が傾き初め、20 時半にシネバルガ左旗の中心アムガランに到着した。

アムガランからノモンハン・ブルド・ソム、そしてアルシャンへ

8 月 28 日、ホテルには食堂が併設されていなかったため、7 時頃近くの食堂にて地元の人々に交って肉まんなどを食べる。筆者は 10 年ほど前、アムガランを訪問したことがあるが、当時は建物も少なく、あちこち道を掘り返すなど工事中であり、周りは草原に囲まれていた。その時に比べると街はずいぶんと拡大している。また、アムガランで興味深いのは、看板に漢語とモンゴル文字のほか、キリル文字モンゴル語（モンゴル国のモンゴル語表記）の表記がある点である。これは後にも触れるように、シネバルガ左旗においてモンゴル国とのあいだで国境貿易が行われているためであろう。その後、同旗の文物管理处の収蔵物を見学し、そこで突厥時代の石人、ノモンハンの写真などを見学することができた。続いて、チベット仏教寺院のガンジョール廟へ移動する。ガンジョール廟は、清代に建立され、交易の中心として名を馳せた寺院である。しかしながら第二次世界大戦や文革期に壊滅的な破壊を受けており、筆者が前回訪問したときは、ひっそりと修復基金を募っている最中であった。今回訪問した

さい、建物のほとんどが補修済みであり、昔の面影はみじんもなかった。ここでメンバーの一部が寺院内部の石碑調査を行った。

10時過ぎに、同旗内の中国とモンゴル国国境の税関、額布都格（Ebudug）口岸へ移動する。口岸とは開港地を意味するが、ここではモンゴル国との陸路貿易の出入り口を指す。税関の建物は、非常に立派で、国境ゲートには漢語とキリル文字モンゴル語による表記が付されている。同税関は1994年に開設されたもので、年に数回、時期を定めて国境貿易が行われるという。周囲は草原が広がり、国境付近には鉄柵が張り巡らされている。シネバルガ左旗側では草刈りの真最中で、この辺りの牧民がバイクと馬で遊牧を行っている光景を多く見かけた。

10時半過ぎに口岸を出発し、アムガランを経由してノモンハン・ブルド・ソムへ向かう道中、小さな池が散在しているのが見えた。11時半過ぎノモンハン・ブルド・ソムに到着し、ノモンハン戦役遺址陳列館へむかう。陳列館の前には、銃や飛行機をかたどった立派なゲートが設置され、そばのプレートには、「国防教育基地、愛国主義教育基地」とある。以前来訪したときは、ノモンハン関係の展示物は、学校の一室に納められていただけであったが、現在の陳列館は三階建てで非常に立派なものである。内部の展示で、まず目を引くのは、満洲国時代における、「満洲帝国」とモンゴル人民共和国の国境を示す石碑である。このほかにも日本軍の銃、手投げ弾、武器などのほかジオラマも設置されていた。しかしながら陳列館は、建築上の問題と入館者不足から閉鎖が計画されているという。外に出ると戦車が10台ほど野ざらしで展示されているが、周囲は蚊が非常に多く、早々に退散した。

お昼過ぎにハンダガイ経由で興安盟に属するアルシャン（阿爾山）へ向かうが、しだいに松の木が見えなくなり、また牧民の姿も見えなくなる。ちょうどこの辺りが遊牧と森林地帯の境目なのだろうか。13時20分にハンダガイ料金所を通過したあと興安盟に入り、食堂で食事する。ここを14時半出発し、ハンダガイから70kmほどのアルシャンを目指した。このあたりは菜種や馬鈴薯、そして小麦畑が広がっており、雨量も多いそうで、シネバルガの景観とは全く異なっている。途中から松林が広がり、ハルハ河と並行しながら車は進んでゆき、16時にアルシャンの温泉博物館前に到着する。そのすぐそばには、満洲国時代の温泉宿（京都将軍浴）も残されていた。アルシャンはハイラル方面から鉄道が建設され、満鉄によって開発された温泉地であるが、現在は大型リゾートホテルが建ち並ぶなど、保養地として大いに賑わっている。一方、アルシャン駅は建設当時のたたずまいを保っているようであった。メンバーの一部は、駅から線路を辿ってアルシャン駅側の回転盤を見学した。周囲はコスモスが咲き誇り、のどかな情景が広がっていた。17時過ぎにアルシャンを出発し、20時半にアムガランに戻り、夕食（中華料理）をとる。

ハイラルへ

8月29日、6時30分に前日と同じ食堂で朝食をとり、7時にハイラルに向けて出発する。途中、羊や山羊の群れと行き交いながら、シネバルガ・ソムを経由して、9

時過ぎにエヴェンキ旗南屯に到着する。南屯では、真新しいエヴェンキ博物館（入場料無料）を見学した後、10時に出発し、いよいよハイラルに向かう。筆者にとってハイラルも10年ぶりであったが、南屯からハイラル中心街まで大規模に開発されていることに、大変驚かされる。ハイラル市内の変化も大きく、目的地であるフルンボイル古城（入場料30元）をあやうく見逃すところであった。フルンボイル古城とは、かつてのフルンボイル副都統衙門を、同じ場所に再建したものである。予想以上に内部の展示は充実しており、八旗や近代史に関する展示などは、フルンボイルという地域性を色濃く打ち出す内容であった。その後、ハイラル神社跡に移動したのち、筆者ほか数名はホテルで休息し、他のメンバーは満洲国時代のハイラル要塞を見学しに出かけた。

大興安嶺を越えるージャラントン、チチハルへ

8月30日、いよいよ陸路で大興安嶺を越える日を迎えた。朝5時30分ホテルを出発する。ハイラル近郊は、工業団地が建ち並んでいるが、ハイラル河を越えて30分ほどで草原が広がる。7時にヤクシ（牙克石）にある森林賓館にて朝食をとり、8時前に出発する。301国道線は、鉄道沿線に並行しており、時々列車が通過する。車は三根河、ウネル河を越えて進んでゆき、遊牧風景のあいだに畑が広がる。また、鉄道沿線付近にはロシア式の家屋がいくつも残っており、一部は現在も使用されているようである。途中、「興安嶺隧道」（1900年建設）と記されたトンネルが見え、そばには古いトンネルも併設されていた。また附近に多くのロシア式家屋が残っており、そこから、いよいよ森林地帯へと入っていく。10時前に新南溝村付近で「新南溝偽満洲国公路橋」という掲示のある陸橋にさしかかった。その付近から見下ろした先には「興安嶺螺旋展線」という掲示があり、そばに古い監視用のトーチカも残されていた。そこから螺旋上の線路が一望でき、左側に残る黄色い建物が、帝政ロシア時代に建てられた新南溝の駅舎のようであった。この辺りからさらに森林地帯を進んでいく。

10時50分、博克図駅に到着する。博克図はモンゴル語表記で *boyutu*（「鹿がいる」という意味）であり、中東鉄道敷設のさいに建設された駅である。駅の周囲に旧中東鉄道の建物が残っていたようであるが、今回は確認できなかった。博克図駅は、大興安嶺の西側に位置しているため、そこからはなだらかな山並みが続き、鉄道沿線と雅魯河に沿った道を車は進んで行く。この辺りでは、トウモロコシ畑が現れ、放牧風景はもはや見られない。途中、喇嘛山、南木（オロチョン民族郷）を通過して、お昼前にジャラントン（扎蘭屯）に到着する。

ジャラントンは、ちょうどハイラルとハルピンの中間に位置し、フルンボイル市に所属する県級の市である。ジャラントンは、清代、ブトハ旗の管轄下であり、多くの少数民族が居住する地域である。また、20世紀初頭に中東鉄道沿線の都市として開発されたため、現在もなお100箇所以上、中東鉄道の建築物が残っている。また、満洲国時代、ブトハ旗が設置され、興安東省の中心としてダグール・モンゴル人たちの政治の中心地となり、日本の敗戦後は、中国共産党のモンゴル人指導者であるウラン

フが一時滞在している。このようにジャラントンは、内モンゴル、ないし近代東北アジアの歴史のなかで重要な都市であり続け、それゆえ、その歴史の舞台となった建物が、今なお観光資源として活用されているのである。

ジャラントンではまず、1905年にロシアによって開設された吊り橋公園（中央北路）を見学したあと、ジャラントン市歴史博物館を見学した。同博物館は1903年に中東鉄道倶楽部として建設されたのち、満洲国時代には宿泊施設として、1955年以降ブトハ旗旗委弁公地として利用され、2006年に博物館として開館したという。続いて、今回の調査の目玉でもあるフルンボイル市中東鉄路博物館を見学する。同博物館は1909年にロシアの森林警察大隊の建物として建設され、2008年に博物館として開館した。内部はさほど広くないが、時代ごとに説明が施され、当時の切符、食器、時計やレール、関連する写真がバランスよく展示されている。満鉄や中東鉄道の研究者にとって、重要な博物館であろう。見学を終えて、ブトハ北路の六国飯店を見学する。六国飯店の前身は1903年ロシア人によって建設されたロシア料理レストランであり、1930年代に六国飯店として開業した。現在は再びロシア料理レストランとして利用されており、内部にはロシア時代の写真が展示されるほか、内装も美しい。

つぎに偽興安東省歴史陳列館に向かう。同館は1903年に建設され、ロシア料理レストランや中東鉄道避暑旅館とともに、1930年代には六国飯店の一部として用いられ、1945年以降は六国飯店と一緒に内モンゴル人民自衛軍騎兵五師司令部が置かれたという。内部の展示はさほど多くなかったが、満洲国の統治時代を専門的に扱う博物館として貴重な存在といえる。さらに満洲国時代の建物として、1932年に設立された、興安東省（分省）の建物も見学することができた。説明プレートによると、戦後は納文幕仁公署として利用され、現在はジャラントン師範学校の建物の一部となっている。筆者はこれまでオランホトで興安南省公署（廃屋状態）、ハイラルで興安北公署跡地（現存せず）を確認してきたが、興安東省公署の保存状態が最も良いと感じた。また、ジャラントンには満洲国時代にモンゴル人のために設立されたジャラントン師道学校も存在したが、その建物を確認することはかなわなかった。

その帰りにブトハ北路に残る、帝政ロシア時代の旧鉄路倶楽部（現オランムチル辦公処）の建物を外部から見学することができた。だんだんと夕刻が近づいてきたが、さらにウランフが一時滞在したという、ジャラントン市烏蘭夫同志紀念館にも立ち寄った。紀念館は1935年に興安東省長オロチョンの官邸として建設され、「解放」後の1948年頃、ウランフが居住し執務をとった建物でもある。紀念館は閉館時間を過ぎていたため、外部からの見学となったが、周囲の開発により、ずいぶん環境が変化しているように感じられた。

以上のようにわずか一日であるがジャラントンの主要な博物館を駆け巡り、見学することができた。今回見学した建築物以外にも、ジャラントンには、中東鉄道時代の重要な建築物として、扎蘭屯衛生所旧址（1903年、現：扎蘭屯市根芸基地）、沙俄管理人員住宅、ブトハ北路に路立僑子弟小学（1903年、現：扎蘭屯市実験小学）、沙俄小学黄房（同）、沙俄馬廐（同）、沙俄倉庫（同）、そのほか扎蘭屯站旧址（1903年、現：

扎蘭屯鐵路車站弁公処)、給水塔(現：房産分段管理处)などが保存されているとのことで、再訪を期したい。しかし今回、地図を手に入れることができなかったことが悔やまれる。今後、歴史都市として売り出すならば、観光マップや解説書などがさらに充実することを期待したい。

17時にジャラントンを出発し、いよいよチチハルへ向かう。18時30分頃、内モンゴル自治区と黒龍江省の境にある「黒龍江界」、および「内蒙古界」にさしかかった。省域一帯には、金代に築かれた、「金界壕遺址碾子山段(全国重点保護文物単位)」の表示とともに、1メートルほどの盛り土が続いていた。地図を見ると、ちょうど内モンゴル自治区と、チチハル市とが接する地域である。金代の境がそのまま内モンゴル自治区と黒龍江省の境になっていることを実見することができ、感慨深かった。18時半、ここでちょうど日没を迎えた。その後、車は暗闇を進んでゆき、20時30分にチチハルに到着する。チチハル市内の通りでは、紙銭を焼く行事がそこかしこで見られる。夕食をとり、国脈大飯店に到着した。

チチハル

8月31日、一日を費やしてチチハルを見学する。チチハルは、黒龍江省ではハルピンに次ぐ第二の都市であり、17世紀末には黒龍江將軍が移駐し、1907年省都となった。かつて市の中心部には將軍府が置かれていたものの、現在、建物は移築されている。はじめに中華西路のチチハル市博物館を訪問する。同博物館は2003年開館したもので、収蔵物は約5000件で古代から現代の文物に及び、近現代史の史料も充実していた。つぎに11時前、市博物館の北側にある黒龍江督軍署を外から見学する。黒龍江督軍署は、清末民初チチハル副都統の私邸があった場所に建設されたもので、民国期以降、チチハルの政治の中心となった場所である。説明書によれば2002年に修復済みとあり、おそらく入り口の重厚な門も再建か新築であると考えられる。続いて17世紀建立のト奎清真寺(入場料10元)を見学後、龍沙公園を見学する。龍沙公園は、清末に建設されたもので、園内には様々な建築物が存在する。その一つとして1926年に黒龍江將軍寿山を記念した寿公祠があるが、説明書によれば、光緒26年(1900年)の義和団事件でロシア軍が黒龍江を侵犯したさい、寿山が指揮をとり、殉職したと記される。また園内には、帝政ロシア時代の領事館の建物が保存されており、1907年から1920年まで利用されていたという。同じ公園内に帝政ロシア領事館と寿公祠が同居しているのは、非常に興味深いことである。その後、昼食をはさんで14時頃、1930年頃建設された、チチハル聖弥勒爾大教堂を外から見学する。

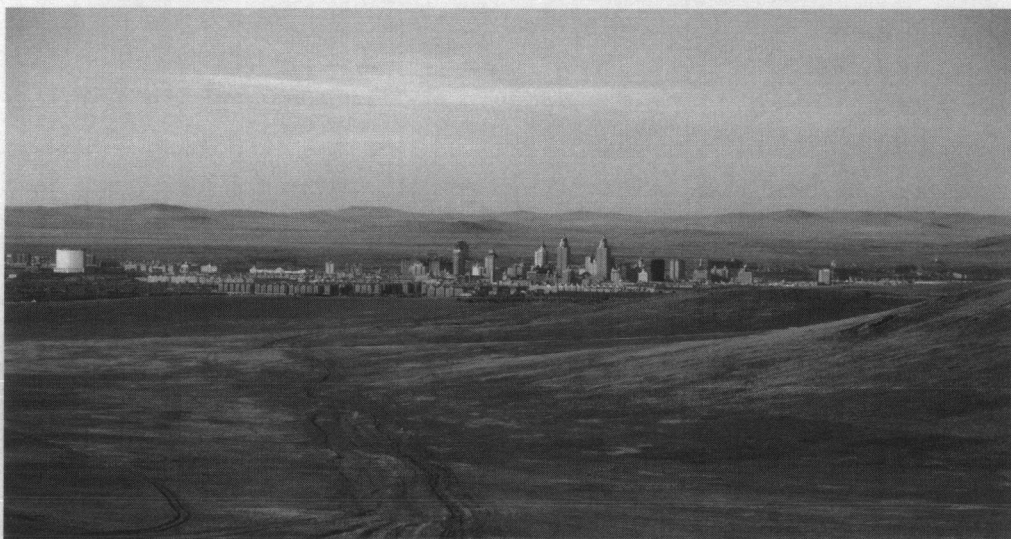
午後からは、郊外のリゾート施設である、名月島に移築された清代の黒龍江將軍府を見学する。黒龍江將軍府は、17世紀以降、チチハル城内(現：中華路)に建立されたもので、義和団事件以降にはロシアに7年間占領され、その後、財政庁(民国期)、税務監督署(満洲国期)、黒龍江省財政庁(1949年以降)、住宅などとして利用されることになる。1999年になると、今度は道路拡張のために、黒龍江將軍府は名月島に移築されたという。日月島へは、チチハル中心地東部に位置する、嫩江の名月島埠

頭から小型船（40 元）が出ている。船は、乗客が集まりしだい出発し、10 分程で島に到着する（入場料 10 元）。我々のほか、乗客は若いカップルだけであった。名月島は思いのほか広大で、目的地である將軍府まではカートで向かうのが便利である。島内には、結婚式場、宿泊施設、レストランなどが建設中であり、福寿閣などの建物も移築されているという。15 時、やっとのことでたどり着いた黒龍江將軍府は、名月島の奥にひっそりとたたずんでいた。建物は修復済みであるが、あちこちで雑草が生い茂っている。内部には、往事の將軍府の写真、清代から民国までの貴重な石碑のほか、近隣のモンゴル旗ジャサグの印（レプリカ）が保存されている。移築先はともかくとして、これまで文献で目にしてきた將軍府を実見することができ、非常に有意義であった。16 時に見学を終了し、再び乗船し嫩江を渡る。その後、17 時頃、チチハル駅を見学し、ホテルに戻った。翌 9 月 1 日午前、我々はチチハルを出発し、北京經由にて帰路についた。

すでに大興安嶺調査から 1 年あまり経過してしまったが、今回中東鉄道の遺構を調査したことで、20 世紀初頭の中国東北部における、ロシアの影響力の深化について実感することができた。しかしその一方で、鉄道沿線や附属地から離れると、それとは全く関わりないエスニック・グループの暮らしが広がっていることにも気づかされる。今回の調査を通じて、中国東北の大興安嶺地域を、たんにロシアと中国の権力のせめぎ合いの場としてとらえるのではなく、さまざまな勢力や民族間の重層性に着目する必要があると、筆者は改めて感じた。

なお、調査後、武国慶『建築芸術長廊—中東鐵路老建築尋踪』（黒龍江人民出版社、ハルピン、2008 年）を入手することができた。同書は中国内に残る中東鉄道の建築物の図録であり、今回実見したものも含まれ、便利であることを付け加えておきたい。

（ひろかわ さほ：新潟大学人文学部）



草原に浮かび上がる満洲里（2012 年 8 月：著者撮影）